

三月の法座・行事

- 十二日・闍如上人御逮夜・常永代経
(午後一時半)
- ・同朋の会例会
(午後二時)
- 十三日・闍如上人御命日
(午前八時)
- 二十四日・正信偈書写の会
(午前十時)
- ・春季彼岸会並総永代経法要
- 御講師 岡崎別院御輪番
福田 大師
(午後一時半)
- 二十五日・蓮如上人御祥月御命日
- 二十七日・宗祖聖人御逮夜
(午後二時)
- 二十八日・宗祖聖人御命日
(午前八時)

一念慶喜するひとは

往生かならず

さだまりぬ

(法語カレンダー)より

編集後記

今回初めて六字城の編集に携わらせて頂きました。この六字城は多くの方がご覧になられるものですので、粗相がないように繰り返し確認しました。言葉というのは一文字の誤りでも、伝えようとしていた思いと変わってくる場合があります。そうならないよう緊張感を持って取り組ませて頂きました。これからも精進して参ります。

堀河

霊園・墓石



株式会社 太田石材店

本社 〒536-0001 大阪市城東区古市1丁目23番20号
 本店 〒530-0042 大阪市北区天満橋1丁目2番18
 TEL 06-6930-5075 0120-30-5075
 FAX 06-6930-5078

六字城

発行

真宗大谷派 (東本願寺) 天満別院
 大阪市北区東天満一-八-二六

電話 六三五一-三五三五
 代表者 輪 番 長 谷 山 法 雄

「和讃のおはなし」

真宗大谷派 鍵役
 宣心院 大谷 暢文
 『諸経讚 (八)』

信心よろこぶそのひとを
 如来とひとしとよきたまふ
 大信心は仏性なり
 仏性すなはち如来なり

(信心を得て法を喜ぶ人を如来と等しいとお釈迦さまは説いていらっしやいます。大信心は仏性であります。そして仏性とは、すなはち如来であります。)

この「和讃のはじめの二句は『華嚴経』の「この法を聞いて信心を歡喜して疑いなきものは速やかに無上道を成らん。もろもろの如来とひとしとなり」に依っています。親鸞聖人は、この箇所を『教行証文類』の「信卷」の「信樂釈」にお引きになりました。そこでは、信心をいただいたて歡喜する人は、必ず無上仏果を開く人であるから、凡夫でありながらすでに如来と等しいとおっしゃっておられます。これを「如来等同」といいます。後の二句は『涅槃経』の「大信心はすなはちこれ仏性なり、仏性すなはちこれ如来なり」に依っています。この文によって、凡夫

が如来となぜ等しいのかという理由が示され、さらに如来より賜りたる信心が、そのまま仏性であることが示されているのです。

仏性ということは、仏教において大きな柱の一つです。さまざまな宗派で、この仏性が論じられてきたわけですが、親鸞聖人は仏性について『華嚴経』と『涅槃経』に依って、そこから釈迦さまの本意を開顕していきます。そして浄土往生の因(原因)と果(結果)を『諸経讚』(五)から今回の(八)まで)の四首において、適宜転用なさっています。仏果をあらわす言葉として『諸経讚』(五)で「無上」「真解脱」(六)で「一子地」、

(七)で「如来」「涅槃」「仏性」を出し、お浄土における滅度の悟り(果)を示します。次いで(八)で因を明らかにします。その因となるのが「大信心」ということです。親鸞聖人は「信巻」において『涅槃経』の「一切衆生、ついにさだめてまさに大信心をもってのゆえに、このゆえに説きて一切衆生悉有仏性といふなり」と引かれています。すべての衆生は仏になれないものではなく、どのような悪人であっても、心を翻して信心を得ることにより仏となりうるのであるとただかれました。ただし親鸞聖人は、阿弥陀さまが回向されるお名号のお力によって仏とさせていただきますと、一歩踏み込んでお釈迦さまの真意をお汲み取りになったのです。

◆春季彼岸会並
総永代経法要のご案内

天満別院では左記の日程で春季彼岸会並総永代経法要をお勤めいたします。尚、法要の後、法話があります。どうぞ皆様ご参拝くださいますようご案内申し上げます。

日時 三月二十四日(金)

午後一時半より勤行

場所 天満別院本堂

御講師 岡崎別院御輪番
福田 大 師

◆真宗本廟

春の法要のご案内

真宗本廟では左記の日程の通り、春の法要が執り行われます。皆様お誘いあわせの上ぜひご参拝ください。

四月一日(土)

師徳奉讃法要

午前十時

親鸞聖人御誕生会(音楽法要)

記念講演

御講師 同朋大学特別任用教授
廣瀬 惺 師
午後二時二十分

四月二日(日)

全戦没者追弔法会 午前十時

記念講演

御講師 ノンフィクション作家
澤地 久枝 師
午前十一時半

四月三日(月)

相続講員物故者追弔会兼

帰敬式受式物故者追弔会
午前十一時

四月四日(火)

蘭如上人二十五回忌法要日中
午前十時

◆別院墓地のご案内

現在、天満別院では真宗のご門徒の墓地使用者を募集しています。冥加金、申請方法等、詳しくは別院寺務所までご連絡ください。尚、収骨等の儀式執行は別院職員が執り行います。

輪番雑感

中国に、「盡日(じんじつ)春を尋ねて春を見ず」という詩があるそうです。春が来た、春が来たというので春を探しに一日中、早朝から野山を駆け巡り春を探し廻ったが、春はみつからなかった。疲れた足を引きつり、わが家に帰り縁先に腰掛けてふと見る

と、目の前に梅の花が一輪さいていたのに目がついた。ああ春はここに來ていたのだとはじめて気付いたという意味の詩である。春は枝頭に在って既に十分。春は遠くに探し求めずとも、今、ここに來ていた。

「阿弥陀仏 みなみに在るを 知らずして 西を願うは はかなかりけり」一休禅師の詩である。この詩の中に一休さんの頓智がある。「みなみに在る」と聞けば「南」の方角を私たちは思う。これが頓智である。「みなみ」は「皆身」なのです。阿弥陀仏はみんな一人一人の身の中に在るのだ。來ているのだ。阿弥陀仏も遠くではない、つねに私を離れていないのです。だからお念仏が出るのでしよう。そのこともわからずに西の方角を願うははかないことです。と教えてくださっています。

とおきはちかき道理、ちかきは遠き道理なり。「灯台本くらし」(蓮如上人御一代記聞書)である。